

論文審査の結果の要旨

氏名 赤 堀 三 郎

本論文の目的は、現代社会学を代表するN. ルーマンの社会学的システム理論が、なぜ「システム理論という土台の上につくられた社会学理論」でなければならなかったのかという観点から、それが「コミュニケーションの自己言及性」を基軸とする理論構成へと展開していった過程とその社会学上の意義を解明することにある。著者は、ルーマンが学際的理論パラダイムとしてのシステム理論のさまざまな概念を自らの理論に取り入れ、かつ自らのものとして展開していく側面を詳細に分析し、それに基づいて、普遍理論としての社会学理論の構築という社会学的課題を解決しようとする試みとしてルーマンの理論形成の過程を理解できることを明らかにしている。

本文は5章からなっており、第1章で、これまでのルーマン研究では哲学的な読み方が中心であったため、ルーマンにとってなぜシステム理論を導入する必要があったのかが明らかにされてこなかったことを論じたのち、第2章では、ルーマンが参照したサイバネティクス、情報理論、開放系の理論、オートポイエシス、セカンド・オーダー・サイバネティクスを中心とするシステム理論の展開史を詳細に跡づけている。第3章は、複雑性の萎縮、ダブル・コンティンジェンシー、メディア理論、自己言及性、オートポイエシス概念の導入を経て、コミュニケーションを要素とする閉鎖性システムとしての社会システム理論の構築に至るルーマン社会学の展開過程をシステム理論との関係を明確にしながら独自の仕方でも記述している。第4章では、ルーマンの最晩年のテーマであった全体社会(Gesellschaft)の理論を分析し、機能分化した諸システムを環境とする社会システムとしての近代社会という位置付けを明らかにしている。第5章は前章までの考察を踏まえ、ルーマン社会学が社会システム理論であった理由を、ルーマンにとって、コミュニケーションとしての社会学はコミュニケーションからなる社会システムにおける観察者を含む観察というパラドキシカルな状況の下での普遍理論でなければならなかったことにあると論じている。

本論文は、社会学上の根本問題を解くためにシステム理論を積極的に活用したという観点から、ルーマン社会学の展開過程を首尾一貫したものとして鮮やかに描き出しており、他のルーマン研究にはない画期的な論考となっている。その一方で、ルーマン理論のもう一つの側面である現象学などの哲学的問題群との関わりが主たる考察の射程に入れられていないけれども、これは本論文の課題設定の性質上やむをえないことと判断される。そのことは筆者自身が自覚した上でのものであり、本論文がルーマン研究として新たな知見を提出したという意義をいささかも損なうものではない。

以上により審査委員会は、本論文が博士(社会学)を授与するに値するものとの結論を得た。